

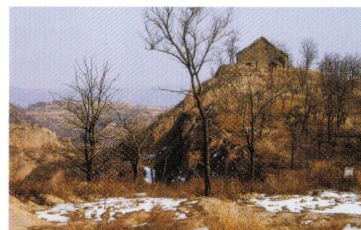
# 日本軍山西省残留問題とは

日本は1945年8月にポツダム宣言を受諾し降伏したが、中国山西省に駐屯していた北支派遣軍第1軍の将兵約5万9,000人のうち約2,600人は、その後も武装解除を受けることなく残留し、中国国民党系軍閥に合流、敗戦後なおも3年半、共産党軍と戦った。残留日本軍部隊は最後の決戦である太原の攻防戦に敗れて投降したが、中国の内戦に巻き込まれた日本人将兵は約550人が戦死、700人以上が捕虜となった。

世界の戦争史上、他に類を見ないこの“売軍行為”は、共産党軍との全面衝突に備えて日本軍の武力を頼った国民党系軍閥の閻錫山将軍が、巧みな駆け引きで第1軍の首脳に働きかけたものとされている。

- 終戦直後の山西省で
- 何が起こっていたのか？

● そもそも閻錫山は、辛亥革命(1911年)後、長年に渡って山西省を支配する中で、石炭などの豊富な鉱物資源を背景に山西モンロー主義を唱えて独自の開発を進めていた。蒋介石の国民政府に対しても、国民党軍の第2戦区司令長官に任命されていたものの、付かず離れずの優柔不断な態度をとっていた。日本の北支派遣軍第1軍が山西省に進駐すると、閻錫山は共産党軍に地盤を奪われることを恐れて日本軍との

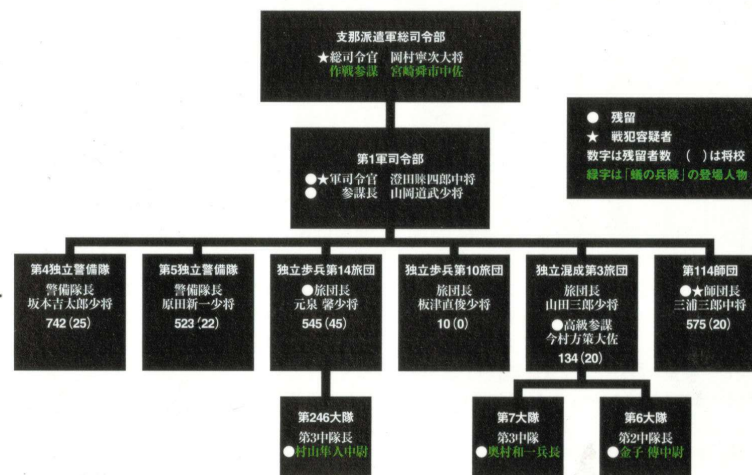


● 人民解放軍との激戦で残留日本兵約100人が戦死した牛耽寨(ぎゅうだんさい)

衝突を避け、また第1軍も閻錫山を利用して日本軍に協力させようと互いに謀略をめぐらせていた。終戦直後の8月31日、閻錫山は第1軍司令官・澄田暎四郎中将を訪ね、第1軍全軍の残留を要請する。翌日、澄田軍司令官は、全軍を残すことは不可能だが一部であれば残すことも考えられると返答し、その際は将兵たちが自分の意志で残ったようにすることが望ましいと伝えたことされる。(注1)

当時、澄田軍司令官は国民政府により戦犯指名を受けていた。本来なら軟禁状態にあったはずの澄田軍司令官は、かつての敵将である閻錫

## 終戦時の北支派遣軍第1軍組織図



山の総顧問に就任し、太原攻防戦では作戦指導も行った。翌1946年2月、閻錫山から残留を強力に要請された第1軍は、軍司令官・澄田中将や参謀長・山岡道武少将の企画で約1万5,000人にのぼる「特務団」の編成を命令した。(注2)

これらの命令は、第2戦区司令長官である閻錫山から第1軍に対する命令にもとづき、山岡道武参謀長の名で隷下指揮部隊に対する指示として出されているが、その内容は澄田軍司令官からの各兵団長に対する命令と考えられる。

こうした第1軍の不穏な動きは、やがて南京の

支那派遣軍総司令部の知るところとなり、日本軍全体の復員を担当していた作戦参謀の宮崎舜市中佐が、急遽、山西省に派遣されることになった。3月9日、特別機で太原に到着した宮崎参謀は、ポツダム宣言や天皇の命にも背く特務団編成の事実を驚愕し、澄田軍司令官や山岡参謀長に「閣下は閻錫山が天皇を殺せと言え、殺すおつもりですか」と激しく詰め寄ったという。(注3) これに対し澄田軍司令官ら第1軍首脳は、言を左右にするばかりで宮崎参謀の説得に耳を傾けなかったとされる。

